

小学校の校内授業研究会における指導教員の助言機能に関する研究

— 関連性評定質的分析法を用いて —

教育実践高度化専攻

授業実践リーダーコース

P09039A

平田幸男

I. 問題の所在と研究目的

授業に関する教員の力量形成において校内授業研究が注目されている。教員へのアンケート調査によると、授業研究を充実させるために効果的だと思っていることの一つとして、指導主事や外部講師を要請して研修することが挙げられている。また近年、指導主事が学校を訪問して校内研修を支援することの重要性が高まり、実践研究を通じたリーダー層の教員の養成と合わせ、地方自治体の教育政策で取り込まれるようになってきている。しかし、その助言がどのように機能しているのかということについての研究は見えない。

そこで、本研究では、小学校における校内授業研究会での指導教員の助言が、参加教員の授業力向上のためにどのように機能しているのかについて、現任校（以下、「対象校」）での実践から明らかにすることを目的とした。本研究における指導教員とは、「指導主事やスーパーアドバイザーといった指導的立場に立つ校外の教員」を指す。なお、本研究では、指導教員の助言機能を明らかにする上で、機能を「役割」と「作用」とに分けて研究をすすめた。分析する指導助言は、平成22年6月に対象校で行われた校内授業研究会での0指導教員によるものである。

II. 指導助言の役割

助言の役割については、助言の中のとくにどの

部分が参加教員の授業に関する力量形成にとって機能していたのかを選定し、それがどのような構造を持っているのかということに焦点を当てて分析した。その分析にあたり、本研究では、関連性評定質的分析法（以下、「KH法」）を用いた。KH法は、数量化理論Ⅲ類の適用により、逐語録から得てきた質的なデータを数学的論理的に表現することによって、言語的資料をよりの確に理解するための手がかりが得られることを目指した手法である。また、質的データの数理的分析を行い分析に客観性を持たせていることから、単一の言語的資料であっても分析可能な手法となっている。

本研究では、指導助言のとくにどの部分の内容が機能していたのかを分析するために、まず「参加教員のコメント」と「助言内容の分節化ラベル」の2つの資料を準備した。「参加教員のコメント」は、校内授業研究会の終了後に、指導助言から一番自分の授業に関する力量につながったと思うことについて21名の各参加教員が短く記述したものである（以下、「コメント」）。「助言内容の分節化ラベル」は、あらかじめ分析者と0指導教員と共同で校内授業研究会での指導助言内容を分節化して要約し、ラベル付けしたものである（以下、「分節化ラベル」）。そして、各コメントがどの分節化ラベルに対応するかを評定することで、指導助言のとくにどの部分の内容が参加教員にとって機能していたのかを選定した。それを「コ

メントと分節化ラベルの対応表」(以下、対応表)の一覧にまとめ、その対応表について数量化Ⅲ類を用いて数理的に処理し、カテゴリ間の関連性を分析した。そして、その解釈により、助言に2つの構造があることを見出した。すなわち、連動性と対比性である。また、見出された理解図式を「助言内容の解釈モデル」として提示した。

以上から、本研究における分析を通して、校内授業研究会における指導教員の助言が、連動性と対比性の構造を持って授業構成の理論を参加教員に示しているという役割が明らかになった。

Ⅲ. 指導助言の作用

助言の作用については、助言の持つ構造がどのような「教師の学び」をもたらしたのかに焦点を当てて分析した。「教師の学び」とは、参加教員による指導助言の受けとめを指す。また、それに焦点を当てるためコメントが分析の対象となる。分析にあたり、本研究では「助言内容の解釈モデル」を手がかりとした。KH法によって得られた分析結果を手がかりとすることで、「教師の学び」に関しても妥当性のある分析が可能である。

まず、「助言内容の解釈モデル」を手がかりとしながら、コメントを、助言の持つ連動性、対比性、連動性・対比性以外がもたらしたものに類別した。その後、類別されたそれぞれのコメントを基に、助言がもたらした「教師の学び」を総括した。なお、その類別や総括にあたり、客観性のある分析を行うため、参加教員に行ったインタビューの回答も参考にした。そのインタビューとは、コメントの収集時に合わせて個々の教員に「なぜそう思うのか。(なぜ自分のコメントがその分節化ラベルに対応すると考えるのか。)」を問うたものである。

以上から、助言の連動性がもたらした「教師の

学び」は「念頭操作ができるようになるという目標にどうつなげていくかを忘れず、念頭操作とブロック操作をくり返して指導することが大切である。そのくり返しの中で、動作や思い浮かべたこと、考えたことが大切であると子どもたちが意識し、学習に見通しを持つことができるようにするとともに、最終的な記号化は子ども自身にさせるようにする」である。助言の対比性がもたらした「教師の学び」は「動作化の仕方は、教師が教えることと、子どもたちに発見させることがある。子どもたちが授業の中心なので、子どもたちに発見させていくことは大切である。動作化は難しいが、自分が中心になって動作を考えるとわかりやすい。子どもたちに発見させながらおさえるところをおさえるような授業を展開するには、教材研究が大切である」である。助言の連動性・対比性以外がもたらした「教師の学び」は「算数は、子どもたち1人1人がイメージしやすい方法で感覚的に学ぶ」である。

Ⅳ. 研究の成果と今後の課題

本研究の成果として、以下の2点があげられる。

すなわち第1は、校内授業研究会における指導教員の助言機能についてその内実を実証的に示すことができたことである。指導教員の助言の効果を検証する上で一つの基礎資料となる。第2は、KH法を用いたことにより、1回の校内授業研究会の言語資料について、より客観性、妥当性のある分析を行うことができたということである。

一方、残された課題は、指導助言によって得られた学びがその後の教師の力量形成や教育実践にどのようなつながったのかを明らかにすることである。

修学指導教員 (佐藤 真)

指導教員 (佐藤 真)